

# 凍らない海を求め 南下するロシア



凍らない海への出口を求めたロシアは、ユーラシア大陸のあちこちで南下をくり返し、他国と衝突する。

## バルカン半島への南下は列強によって抑えられる

18世紀後半以降、地中海へのルートを求めて南下政策を進めたロシアは、ギリシア独立戦争や2度のエジプトトルコ戦争に介入したが、その都度列強諸国と利害が対立し、成果をあげられずにいた。1853年には、ギリシア正教徒の保護を口実にオスマン帝国へ侵入、クリミア戦争が勃発する。しかし、イギリスやフランスなどがオスマン帝国を支援したため、ロシアは敗れた。

その後、バルカン半島のスラヴ民族の独立運動が高まると、ロシアはパンニスラヴ主義を掲げ、スラヴ民族救済を理由にオスマン帝国に対してロシア・トルコ戦争を起こす。これに勝利したロシアはバルカンへの進出を果たしたかにみえたが、イギリス、オーストリアがこれに干渉。結局、78年のベルリン会議でロシアの要求は抑えられ、南下政策はまたしても挫折した。一方、中央アジアではブハラやヒヴァなどのハン国を征服して、ペルシアやアフガニスタンをうかがい、極東では弱体化した清へ圧力をかけ、沿海州などを奪った。

## 皇帝による上からの改革は失敗に終わる

クリミア戦争での敗北は、農奴制を続

けるロシアの後進性を示すものであったため、皇帝アレクサンドル2世は近代化を目ざして自由主義的改革を始めた。1861年に農奴解放令を出し、近代的な制度の導入を図ったが、徹底されず、改革は失敗に終わり、皇帝自身も過激派によって暗殺されてしまう。

1870年代には、学生や知識人(インテリゲンツィア)が、ロシア土着のミール(農村共同体)を基盤とする社会主義を達成しようと、ナロードニキ運動を展開したが、これも失敗に終わった。

## クリミアの戦場から生まれた赤十字

クリミア戦争では1年にわたるセヴァストポリ要塞の攻防をはじめ、多数の死者と負傷者を出す凄惨な戦闘が展開された。イギリス出身のナイティンゲールは、看護婦としてクリミア戦争に従軍。野戦病院において負傷者・患者の立場に立った看護を実践して死亡率を半減させ、「クリミアの天使」と称された。この活動がのちにアンリィデュナンによる国際赤十字社創立へとつながることとなる。



ナイティンゲール

## 19世紀後半のロシア

この時代のロシアは、通商路や不凍港の確保だけでなく、国内の不満を外へ向けさせるためにも、南下政策をとらざるを得なかった。

← ロシアの南下方向

